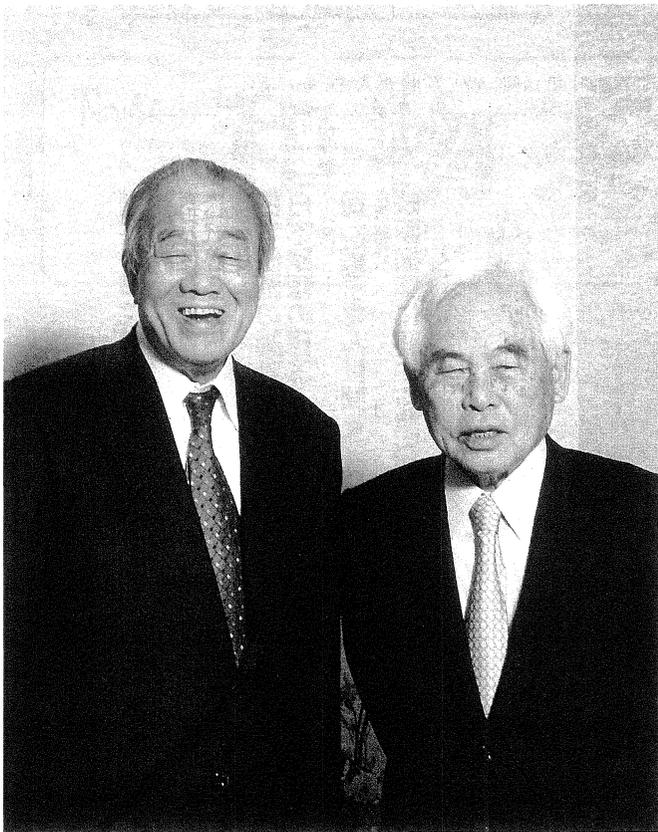


手づくりりで集団創造



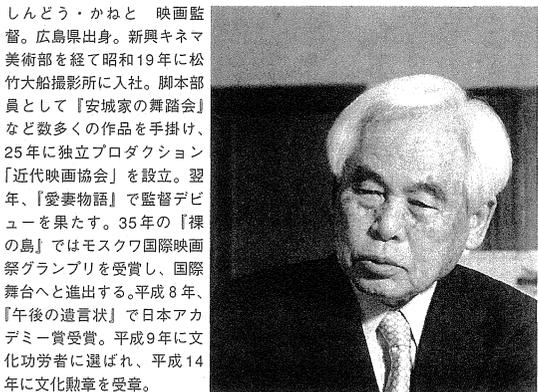
集団という個性

河合 これまでのお仕事はどれくらいの数になりますか。

新藤 テレビも合わせますとシナリオは五〇〇本ぐらい、映画監督は四七本です。昨日、九一歳になりました。去年、映画をつくりまして、今年の秋ごろ上映できるんですけど、監督の仕事は体力が要りますね。

河合 俳優からスタッフまで全部動かすのですから、体力も心もものすごいエネルギーでしょうね。

新藤 長いこと映画製作に携わってきたから、それをやると割に健康になったりするんです。ただ、日程は厳しく、例えば今回の映画は、主演女優の制限が二五日ほどで、何月の何日から二五日あけようという計画です。それにあわせて



しんどう・かねと 映画監督。広島県出身。新興キネマ美術部を経て昭和19年に松竹大船撮影所に入社。脚本部員として『安城家の舞踏会』など数多くの作品を手掛け、25年に独立プロダクション「近代映画協会」を設立。翌年、『愛妻物語』で監督デビューを果たす。35年の『裸の島』ではモスクワ国際映画祭グランプリを受賞し、国際舞台へと進出する。平成8年、『午後の遺言状』で日本アカデミー賞受賞。平成9年に文化功労者に選ばれ、平成14年に文化勲章を受章。

他の方もスケジュールを組み、一日に何カットかずつは撮らなきゃならないというふうな状態です。

河合 そのカットがすべて監督の思ったようにいくわけではないですね。

新藤 相手は違う人間ですから、違うことを考えてる。いくら打ち合わせを密に

やっても、現場へ行きますと現場の雰囲気、「いや、こういう考え方はちょっと違うと思う」と出たりします。一人で考えていくけれど、やはりカメラマンや、スタッフがいる。そういう意味では、集団ですよ。寄せ集めの集団ではいけないから、集団が一つの集団という個性になる。簡単に言う気持ちを一つにするというのですが、そうなりませんと、何をやるうかということが一瞬にして決まらない。難しく言うところ「集団創造」というようなことになるのではないのでしょうか。

河合 「創造」が「騒動」になると困りますね（笑）。ダイナミズムがすごく面白いんじゃないですか。

思いどおりにいかなくて、腹が立つたりすることもありますか。

新藤 それは始めからしまいまでそんなんです（笑）。俳優もですね。事前に台本を読んで、細かい部分を俳優が身体的表現でいろいろ表していくわけです。しかし、頭では思っても、体が動かないということがあつた。

監督もその人の癖を熟知するとか、技術を持っていないといけないんです。そ

の人の個性を十分に生かすやり方をしながら、私の思っているように撮るといふことでは面白いですよ。

キラキラする映像

河合 日本映画の流れとか、これからどうするとか、その辺でお考えのことはありますか。

新藤 僕の考えでは、日本映画は何か本能的なところへ差しかかっているような気がします。

結論を先に言うと、溝口（健二）監督、小津（安二郎）監督、木下（恵介）監督の映画、いろいろ優れた映画がありますね。それは個人が金を出してつくった映画ではなく、会社が儲けたいために金を出したんです。それがうまくいかなかったら、会社が投資できなくなつたんです。昭和三年に映画人口が延べ一億切つたわけです。

また、映画会社も非常に努力はしましたが、撮影所をやめてしまった。それまで撮影所は、助監督を養成していました。それから、シナリオライターが僕がいた

会社には二五人もいました。そのシナリオライターと助監督というのは知能集団と言ってよいと思います。それが三〇年前になくなったわけです。

優れた監督の作品を会社がお金を出してつくっていたという条件が消えて、撮影所がなくなってきたということは非常に大きなことなんです。お金がないから、実験的な映画とか、いろいろつくりますけど、金を出してつくった贅沢な、本当にキラキラするような画面を撮ることができなくなった。

外国では、興行会社、撮影所がありまして、作者がつくりたいものを、撮影所を借りてつくって、それを興行会社が売るか契約して上映するということになっているんです。日本はずっと以前からお店に番頭さんがいて、小僧さんがいて、どんな品物をつくるかという形で映画をつくってきたわけです。

日本の優れた映画は、会社がお金を出してつくっていたのですが、今はなくなりました。原点から考えていただけだと、日本映画は再興しないと思うんです。

ことが起きるわけです。

映画会社は、全国的に映画館を持っていますから、うまくつくられたのを配給すればいいわけで、うまくいかない場合は、映画をつくったプロダクションが損をして、つぶれるだけです。映画会社に命をかけて映画をつくって、何とか食っていきたいと思うようなさすまじい感じがなくなつたわけです。そういう意味でも、映画撮影所、映画製作会社が熱意を失つたというのは非常に大きいと思います。

河合 この辺でもう一遍考え直そうと、文化庁では、映画振興の懇談会をやりました。根本的なことは金の問題があるから、どう考えていったらよいでしょうか。

新藤 アメリカ映画はそのときに五〇何本上映して儲かっているわけです。それは、娯楽が基本だという考え方に徹しているわけです。日本映画でも、みんな芸術でなければならぬ、堅苦しくなければならぬということじゃないんです。ウケている映画は人気があります、そうしますと、画面に何が映っているか、非常に厚みのある、キラキラとした映像が映っているか映っていないかということにな

現在、映画をつくる青年は毎年増えていきますし、実験的な映画とか、小さい映画がつけられていくのだから、日本に映画会社にかわるようなプロデューサーがあらわれて、新たな思いで映画をつくるようにならないと、日本映画は元に戻らない気がするんです。優れた映画は他国の人も、細かい内容はわからなくても、感覚的にわかるわけです。映画言語というのがあります。日本映画をしつかりつくれば世界へ通じることでしよう。

今は、日本の映画づくりが根本的に崩れてしまっている。しかし、監督も助監督もいっばい出てきていますし、シナリオライターも現役の人が六〇〇人ぐらいいるんじゃないですか。

大正時代から映画会社が芸術的に目覚める前に、儲けたいという優れた人が出てきた。そうしますと、才能を発見しなきゃならぬし、その才能が大きくなって、優れた映画をつくるようになったということなんです。映画人口が一億には戻らないけど、五億にはなります。慌てないで、これから新しい日本の映画づくりを発足するというようなことを興したい

つちゃうんです。

日本でも今、映画をつくる人は、前よりたくさんいて、いっばい映画があまってるんです。しかし、つまらないから上映しないんです。一本の映画を生命かけてつくる。アメリカでつくった映画のあり方はみんなそうなんです。一つの会社を興すぐらいの気持ちで投資してつくって、それを配給会社にかける。

河合 アメリカの場合は、PRから何か全部できてやりますから、あれに對抗するためにこちらはよっぽど頑張らな

言葉なしで通じる

河合 私は以前、チューリッヒに留学していたときに「裸の島」を観たんです。瀬戸内海の孤島で農業をしながら暮らす家族の物語で、ものすごく感激しましたね。まったく科白がないでしょう。僕は日本文化についてチューリッヒで話したときに、「裸の島」のことを言いました。私は心理学を専門にしているのですが、言葉が通じないときは、言葉なしでも通じる

と思っ

ベテランが今消えつつありますが、ベテランの技術を受け継ぐようなことをやっていけばいいんです。その職人が何かに出会う。俳優、あるいはその人の感覚に訴えるものに出会ったときに、ひよつとして芸術作品が生まれるんです。基本は技術だと思っ

河合 つくるとすると上手にしないと

新藤 今は、シナリオを覚えるのにも、シナリオ講座や、学校がありますし、専門的にいろいろやりますから、前より良くなつたんです。しかし、つながり、つまり実際の経験を通して固まる機

おとし、日本映画が二八一本できているんです。一八一本が単館上映という現状では、志を立てて独立プロをやって、自分がシナリオをつくって、自分が監督をやったけれど、うまくいかないという

あの映画を観ると、本当に言葉なしで、心が通じるものですね。

新藤 言葉なしに通じるというのが映画の本質だと思います。「裸の島」は映像で訴えれば、訴え切れるんじゃないかと考えてスタッフ・キャスト、全員で一五人の少数でつくりました。前から考えていたことを一遍表現してみたいと思つたんです。水を船で運んで、乾いた大地にかけますね。毎日、毎日、水をかける場面を撮っているから、スタッフも「こんなに水をかけてどうするんだ」というのですね。私は、「それは違うんだ。みんな心が乾いているから、水をかけるんだ」ということを言いましたね。

河合 ものすごく通じました。心を扱うときも、水をかけるのと同じです。つまり、はじめは「元気になってください」というと、「死にます」と返ってきます、それに対して「何とか元気になってください」と徹底的に言葉をかけ続けたら、相手からよい反応が出てくるわけです。

新藤 「裸の島」では、お金がないから、必要なだけの人間でつくろうと言ったんです。二人でつくれるものは、二人



な力というのは、地域の雰囲気伝える力があつたんじゃないですかね。河合 土地のパワーというか、すごさというか、そういうものをどれだけ作品の

が一番いい力を出しやすいという、簡単な原点を発見したんです。ですから、映画をこれから製作するのに、その映画には命が通つてるといふふうな一本ずつを必要な人間でつくればいい。河合 命を込めてね。新藤 そういう考え方で始めれば復興するんじゃないですか。河合 それはほんとに大事なことです。それが「裸の島」じゃないですけど、根本的なところにつながったら、全部世界に通じるんですからね。新藤 本当は映画というのは手づくりなんです。河合 手づくりでつくる原点みたいなところで、もう一遍映画をつくり直していただくとういすね。

師との出会い

河合 溝口監督については、出会いとか、印象的なことかあります。新藤 はじめて溝口さんの撮影現場を見ましたところが、テストをやるばかりで、撮らないんです。「もう一遍やってください」「気持ち反射させてください」と

か、何かようわからんことを言ってるんです(笑)。俳優が「先生、やってみてください」と言つたんです。そうしたら、烈火のごとく怒つて、「僕は俳優じゃありません」「そんなまねはできません。あなたは俳優で月給もらつてんだから、いい演技をやりなさい」というようなことを言うんです。僕は隅のほうでそれを聞いて、実に傲慢な人だと思つてね。そのうちにラッシュのフィルム(撮影結果を早く見るためのフィルム)で、今までどういうふう撮られたらうかというのをみんなが観るんです。そうしたら、実際の人間がそこに生きてるんです。それで溝口さんの弟子になりたいと思つたんです(笑)。溝口さんのところへ行つて、「弟子にしてください」と言つたら、「あ、いいですよ」と言うんです。溝口さんが「君の才能を見ないと、君を弟子にしていけないか」といふことを言いますから、一本書いてください」といふことを言いますから、一本書いていきましたら、「これはストーリーだ。シナリオじゃない」と言うんです。がつくりきましたね。しかし、それが非

常によかつたんですね。純粋な正直な人なんです。映画界で心から尊敬するただ一人の人です。溝口さんは東京の人ですが、京都で開眼されましたね。京都人を見て、京都人のあの粘りのある、また、どこかやさしいけど力強いところを学ばれたんじゃないですか。

関西から元気に

河合 文化庁では今、「関西から元気に」と頑張っているんです。あまりにも東京一極集中だから、「関西元気文化圏構想」といまして、関西から頑張ろうと思つてるんですが、関西のよさとか、関西の文化的な味とか、こういう点に注目しているということがあります。

新藤 ドラマでは近松門左衛門です。僕はドラマではシェークスピアに対抗する人だと思つています。すごく早書きで事件が起きると、早くそれを取り上げて台本を書く。それはもうすばらしい力を持つてたんじゃないですか。時代を超えて生き抜くような力を持つていらっしゃるんです。京都の人が持つていらっしゃる潜在的

中に込められるかということもありません。新藤 人間も生き物ですから、生まれたところの風土からくる影響を全身に背負つてますね。例えば広島のスズメと青森のスズメは、同じ形をしてるけど、心が違うと思うんです。僕は、生まれた広島から抜け切れない。大阪で生まれた者は、大阪の風土から抜け切れない。そういうことで地域の文化が独特に育つんだと思つています。

これからは地方の都市の、あるいはいろんな地域の魅力を育てると、いいんじゃないですか。私のごまかしのないところはどこかなといつて考えると、やっぱり生まれたところだといふ感じを受けちゃうんです。関西の文化に力を入れられるというのは、京都の人、大阪の人は喜ぶんじゃないですか。河合 それで頑張りたいと思つています。(了)

「くだら」の由縁

文化庁の抜穴 河合隼雄

先日、文化財の保存と活用について、韓国と交流、協調をしてゆこうと、韓国の文化財庁に調印のために出かけてきた。

その後で、百済時代の遺跡などに案内していただいたが、ある村で食事をしたときに、実はここは川辺の港のあったところで、日本が百済と交流があった時代は、日本の舟がここまで来たのだと言われる。感心して聴いていると、この村は、昔は「くづれ」と呼ばれていて、その名がなまって、「くだら」の国と日本人が呼ぶようになったとのこと。これは、まったく驚きだった。「百済」をどうして「くだら」と呼ぶのだろうかなどと、文化庁の人たちと話をしたので、これで疑問が氷解したわけであるが、あんがい日本人たちは知らないのではないかと、ここに紹介した次第。そんなことは、ほとんどの人が知っている。今更「くだらない」ことを言うな、と言われるかも知れないが。